

令和2年度 学校自己評価結果等報告書

学校名（ 豊岡市立豊岡南中学校 ） 校長名（ 和田 信 吾 印 ）

1 学校教育目標

「21世紀を担う 心豊かな生徒の育成をめざす」

2 学校教育推進の視点

①安全・安心な南中に ②学習が充実した南中に ③心の通い合う南中に
④地域に根ざした南中に

3 総合的な自己評価

・今年度は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、年間の授業や行事予定、内容を大幅に変更することになった。そのような中でもできることを考え、工夫しながら取り組むことができた経験は来年度以降にもつながると考える。子どもたちの心身の成長に焦点化し、さらなる工夫や改善を図る。
・様々な制限や変更をしてきた中でも、子どもたちは比較的落ち着いた「いつも通り」の学校生活を送ることができている。「子どもの心に寄り添うこと」を基盤とした生徒指導の積み重ねの成果が出ていると感じる。今後さらに研修を重ね、より子どもたちの心の理解を深めていかなければならない。
・超過勤務時間の減少は多くの行事が縮小・削減されたことも一因であるが、職員の「早く帰る」意識が高まってきていることが大きいと感じる。互いの呼びかけや無駄をなくす日々の取組などの積み重ねによるものである。今後さらに「意味ある業務の削減」を図る。

4 自己評価結果（A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない）

領域	評価の観点	評価項目	達成状況	課題を踏まえた改善の方策
教育課程	・ 確かな学力を身に付ける学習指導	探求的で深い学びを意識した指導法を工夫している	A	<ul style="list-style-type: none"> ・約90%の生徒が「授業はよく分かる」、「真剣に取り組んでいる」について肯定的である。今後も新学習指導要領の方針に沿った授業のさらなる改善と、放課後学習会「がんばりタイム」など個に応じた学習支援を進める。 ・家庭学習など自主的な学習をする生徒の増加が認められる一方、全くしない生徒との二極化が課題となっている。1人1台のICT機器の活用を含めた個に応じた課題設定についての工夫が必要である。 ・道徳の教科化について講師を招聘した校内研修などに取り組んできた。今後さらに評価についての研修を重ね、「心の成長のための道徳」の指導について深めていく。 ・特別活動についての自己評価が大きく下がったが、行事の削減・縮小が原因と考えられる。行事の意義に焦点化した再構成が求められる。
	・ 道徳教育	全教育活動の中での道徳性の育成が図られている	B	
	・ 英語遊び・外国語活動・英語科	「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能を総合的に育成している	B	
	・ 総合的な学習の時間	指導計画に基づいた指導を行い、評価方法を工夫改善している	B	
	・ 特別活動	学校・学年行事を通して、集団や生徒個々の成長が図られている 日常的な生徒会活動の充実を図り、生徒の自治能力を高めている	B B	
学校運営	・ 開かれた学校づくり	教育方針や学校・学年・学級の様子を分かりやすく伝えている	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「開かれた学校づくり」についての保護者アンケート数値が下がった。保護者が来校したのが秋のオープンスクールのみであったためと考えられる。学校だよりやホームページの充実やそれらの周知、またオープンスクールの持ち方についても工夫が必要である。 ・勤務時間の適正化については、年々着実に自己評価が上がってきている。業務の効率化、仕事の選択と集中に焦点を当てたさらなる取り組みを継続する。 ・生徒指導面の総合評価はAであるが、昨年度からは軒並み自己評価数値が下がった。小さなほころびを見逃すことなく、次年度以降意識して取り組む。 ・危機管理体制の整備については、コロナ禍にあってソフト面、ハード面ともに高い意識で取り組めた。今年度作成した「学校危機管理マニュアル」を元にした不審者対応をはじめとする訓練に取り組む。
	・ 勤務時間の適正化	勤務時間の適正化に向けて取り組んでいる	B	
	・ 引継ぎ連携システムの強化	小学校からの情報を有効に活用するなど、連携が機能している	A	
	・ 生徒指導（いじめや不登校の問題を含む）	問題行動の未然防止や早期発見、早期対応に心がけている	A	
	・ 職員研修の推進	研修の計画、推進体制、進め方が適切である	B	
	・ 危機管理体制の整備	実効性のある学校マニュアルの見直しを進めている	A	
課題教育	・ ふるさと教育	生徒に豊岡の良さを学ばせる取組を行っている	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさと教育について年々生徒の意識が高まっている。小中一貫教育による成果と思われる。中学校でもより深めていく必要がある。 ・コミュニケーション教育は、多くの保護者が「将来必要」と感じている。限られた時間だけでなく、学校教育全般においてコミュニケーション力を高められるようにする必要がある。 ・コロナ禍において、ほとんどの課題教育について講師招聘、地域との連携などの活動ができなかったため、評価が下がっている。来年度も同じような状況であると想定した計画を進めていく必要がある。 ・「コロナ禍における体験活動」をどう進めていけばよいか大きな課題である。他校の取組も参考にしながら、有効な取組を模索していく。 ・健康教育については、一層関心が高まり生徒や家庭とも連携した取り組みが強まった。一方で「眠育」の成果が分かりにくく、マンネリ化しないかという危惧がある。家庭との連携を強めるためにも取組の工夫が必要である。 ・情報教育について、1人1台のコンピュータ導入について急ピッチで整備が進められている。有効な使用について研修を深めていく。 ・特に1年生に登下校時の自転車事故が多い。地域や小中で連携した交通安全指導の一層の推進を図る必要がある。
	・ コミュニケーション教育	自分の考えを主張し、他者の考えを理解する場面を設定している	B	
	・ キャリア教育	生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて進んで行く力を育成している	B	
	・ 体験活動	目的を明確にした体験活動を行っている	B	
	・ 人権教育	教科・道徳・総合等、全領域で人権尊重の精神の育成が図られている	B	
	・ 特別支援教育	生徒個々の課題を明確にした指導計画を作成し、実践されている	B	
	・ 環境教育	教科・道徳・総合等、各領域で環境教育への取組を進めている	B	
	・ 安全教育・防災教育	避難訓練や交通安全教育が適切に行われている。	B	
	・ 健康教育・食育・体力づくり・運動遊び	眠育を含め、望ましい生活習慣の育成を図る取組を進めている	A	
	・ 読書活動	読書活動を推奨し、生徒の読書活動の向上に努めている	B	

5 自己評価方法（児童生徒・保護者・教員に対するアンケート等）についての意見・改善点

・生徒、保護者、職員それぞれのアンケート項目については妥当だと思う。今年度は保護者が来校しにくかったため、このようなアンケートにより意見を集約することは有効であったと思われる
・職員から多くの意見を集約できたことは、改善点である。これらの意見を今後はどう生かしていくかが重要になる。

6 総合的な外部評価

・コロナ禍においても、これまでと同様に落ち着いた学校生活を送ることができていることは、これまでの小中一貫教育や学校と家庭の連携の積み重ねによるところが大きいと思われる。
・今後は地域や家庭状況が大きく変わることも予想される。さらに学校の組織力を高め、各小学校や地域・家庭との連携をはかりつつ、未来のふるさとを支える人材育成をお願いしたい。

自己評価の妥当性

・先生方の指導の工夫により、生徒が授業に積極的に参加している様子がうかがえる。
・特別活動についてはAからBに下がった。コロナにより実施できなかった分、今後の工夫が必要になる。
・特別活動については「心の成長」の一環として、コミュニケーション能力を高める内容を充実させたい。

・今年度はオープンスクールの機会も持ちにくかったこともあり、評価が伸びていない。持ち方についての工夫が必要である。
・勤務時間の適正化については、着実に改善されてきていると思うが、勤務時間外の会議をなくすなど、さらなる改善が必要。ぜひAの評価になるように。
・生徒指導については、高い評価が得られているが、今後の状況に合わせた指導の仕方について継続して研修を積んでいただきたい。

・「ふるさと教育」「コミュニケーション教育」「英語教育」「学習指導と生活指導」は相互に関連するものであることを念頭に進めていただきたい。
・コロナで実施できなかった体験活動があることで評価が下がっているように思う。体験活動は生徒の心の成長に大きく影響するものである。取組を工夫し、評価の改善をお願いしたい。
・安全教育がAからBに下がっている。地域からの自転車マナーの苦情、特に1年生の自転車事故が多かった。重点項目として取り組んでいただきたい。
・中学までの読書活動は、今後の人生に大きく影響を与えるものである。義務教育中に習慣づけたい。さらなる工夫をお願いする。

※上記の評価の観点は市統一とするが、各校で特色 ※評価項目は各校の実態に応じて設定するが、ある活動・重点項目を追加してもよい。 外部評価者が理解しやすい具体的内容の記述に努める。